

琉球大学学術リポジトリ

巻頭言

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2021-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩野, 敦子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48178



『んじたち』第5号 巻頭言

教育学研究科長 萩野敦子

いささか旧聞に属しますが、2018年度の幼稚園から2022年度の高等学校まで順次全面実施される新学習指導要領の土台となった中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（2016年12月）に、「予測困難な時代に、一人一人が未来の創り手となる」という見出しを持つパラグラフがありました。「これから子供たちが活躍する未来で一人一人に求められるのは（中略）、直面する様々な変化を柔軟に受け止め、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかを考え、主体的に学び続けて自ら能力を引き出し、自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していくことであると考えられる。」という一文には、人間が産み出したテクノロジーに人間自身が踊らされることなく、それをコントロールして一人一人がよりよく生きられる社会を実現しようという希望と期待が込められており、「予測困難」ではあっても決して「予測不可能」ではないという明るい確信がありました。

ところが皮肉なことに、人の死を経ない「譲位」という明るい手続きにより始まった令和の時代の元年が終わったとたん私たちが直面させられたのは、新型コロナウイルス感染症という「予測不可能」な敵と、それゆえの漠然とした不安に包まれた暗い日常でした。もちろん、現代医学をもってすれば疫病としてのコロナそのものは「予測不可能」ではありません。けれども、衣食住や仕事、学び、趣味などさまざまな要素から成る私たち人間の「生」という営みについてこの一年余を振り返ると、予想もしなかった現状に驚き呆れるほかないというのが実感です。今は何よりもまず、この疫病により直接的または間接的に被害を受けて苦しんでいる方々に対して、明日が良き日となるよう祈るばかりです。

しかしながら、コロナと共存する日々は同時に、創意工夫という種を蒔き、挑戦という水やりをしながら、新しい日常で「私たちに出来ること」を实らせていく日々となりました。残念ながら今年度はなかなか足を運ぶことができていませんが、学校現場はまさに子供たちとともに「新たな価値を生み出していく」日々となっているだろうと想像できます。

この『んじたち』第5号に掲載された、教職大学院で学ぶ現職教員および教員の卵の皆さんの実践の提案は、「新たな価値を生み出していく」意欲にあふれたものであろうと思います。提案者の皆さんにはそれらの実践を、「ウィズコロナ／ポストコロナの時代」においてどのように継続しうるか、ブラッシュアップしうるかという視点からいま一度見つめ直していただき、「予測困難」「予測不可能」といった言葉に惑わされず、明るい灯火として子供たちを照らし出す希望にあふれた実践となることを、願っています。